

野間宏全集

第九卷



野間宏全集

第九卷

筑摩書房

野間宏全集 第九卷

一九七四年四月三十日第一刷発行

著 者 野間宏

発行者 井上達三

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一(代表)
郵便番号一〇一―一九一
振替東京四一二二三

本文印刷 暁印刷株式会社
製本 和田製本工業株式会社

目次

青年の環 3

第四部

第一章

開始

黄金の秤

第二章

表と裏と表

「春日」

肌の青・花の青

第三章

小淀

黒の部屋

融和屋

第四章

顔・顔

笑う太陽

匂う秘密

変化

荆冠旗

『青年の環』と私

577

537

508

467

426

377

343

301

青年の環

3

表と裏と表

第四部

第一章

開始

一

右手に風呂敷包みをさげた大道出泉は、すぐにも家に帰って来てほしいという母親の重子からの電話を、いまでもまったく無視して歩きつづけた。彼のめざす第二の目標である小山の家は、この狭い通りの果てるところに開けている川の向う岸の辺りにあるにちがいないと考えられる。その見当が狂うことは、親父のあの白い麻の背広をつけて涼しげにつき出したあのととのった顔が、一夜にして電気事故のために醜く変りはてるようなことがよしあろうとも、ありえないだろう。ぜひともそこに立ち寄りあの小山に会って、何かをあのきのこのような耳にふきこみ、田口吉喜について一寸したことでも引き出せるものなら引きだしたい。家の方へ帰るのはもちろんそれからのことだと彼は思うのだ。

たしかにあの田口吉喜には昨日父親が出泉に告げたような何事かがあることは確実になったと考えられる。それは出泉が予想していた以上に悪質なたくらみに導かれている何事かなのだ。しかしその田口自身を追うのはやはり少し後に廻さなければならぬ。いや、このように、田口をすぐに追うのを後にまわして小山のところに駆けつけるというのも、もちろんそれはつまるところ田口を追っているというほかにはないことではないか。……大道出泉は彼が計画した田口吉喜の下宿訪問が失敗におわり、田口の下宿が田口が会社に届け出ていた住所番地でないことが明らかにになったからには、やはりこうして田口の住所を探すのはしばらく先のことにして、小山を訪ねてそこから逆に住所を隠している田口のことをたどるほかないと思うのだ。もちろんこの小山訪問も彼が昨夜一晩中かかってようやく決めたことである。先ず田口の下宿、もしもそれでうまく行かなければ次にはこの小山のところというのが昨夜考えた今日の彼の行動だったのだが、その第一の行動が失敗したからにはぜひとも次の第二の行動を成功させ、それを足場にしてあの田口にせまって行くほかにはないのである。

そう、昨夜、足にまといつく夏毛布を蹴とばし蹴とばししながら考えを重ね、ようやく明け方近くになって暁の薄青い窓を占める空をちらと眼にしながら、心を決め、くわだてたこのことを、如何に大きい事故が父親の会社に起ったといつて、それほど簡単に後廻しにするわけにはいかなかったのだ。母親からの電話はいまも時々彼の後頭部の辺りに

ひらめくように浮かび出て彼をおびやかし、彼に帰るよう
に促すのだが彼の足を前へ前へと強く引っぱるようになる
のは、やはりいま、いよいよ新たに見えはじめてきた、あ
の田口のこれまでとは違った一つの姿なのだ。

通りには人影はなく、また物音もなかった。かつてまだ
この川にも小さいながら水運があった時、この川筋の水運
をたよりにつくられた建物を改造した家々のなかに、ひと
は夏だというのに奥深く閉じこもっているかのようなので
ある。もちろん水の後を追うようにして一日中遊び歩いて
いる子供たちが川辺から引き上げてくるならば、たちまち
この古風な、と言うよりもむしろ型破りなと言った方がよ
い重々しい屋並みの辺り一帯も、たちまち防ぐことの出来
ない騒ぎと声とでみたまされるに違いない。

「おかあさんは、いつ、あこへ行ってきやはったんや？
え、前の月曜でっか、電車がえろう混んでましたやろ。」
不意に出泉の耳に聞えてくるのは少年成瀬のやわらかい大
阪弁である。「そうですがな、前の月曜に行つてきました
がな。ええ、ええ、電車がえろう混んでましてな。あっち
いおされ、こっちいおされして、立ちづめでしたがな。も
う一日、おそう行つてましたらよかったに、もん日の方が
すいてるのやないかと思うたのな、それがそもそも、ま
ちがいのもどしたわ。」答えているのは大柄な成瀬の母
親である。裏の川べりから入りこむほの暗い光りが、父親
の残して行つた貯金と家財のなかに親子二人をようやく護
っているかのようにだった。

大道出泉は丁度通りの中程のところに建っている、その
まわりの家とはちがつてその一軒だけ板壁の下方のところが
竹張りになつていて一寸構えのしつかりした家の前を通
り過ぎて行つた。すると彼の足はほんの一瞬少しばかりそ
の速度を奪われて、突然一人の母親とませた少年のただ二
人だけががつくつていたほの暗い光りのさす、小さい空間を
そなえた過去のなかへと踏み込んで行くかのようにだった。
彼のうちには何よりもまず、成瀬の家の表の板壁の下方の
ところを占めていた、磨きのかかったつやのよい竹張りが
甦り、それと同時に少年成瀬とその母親のやりとりするい
かにも柔らかくゆつたりした大阪弁が聞えた。

はやく父親を失つたためかクラスの誰よりも早熟で、
(そう言えば、あの矢花もまたはやく父親を失つたのだが、
いや失つたにかかわらず早熟どころかむしろその反対なの
だが)大人びていて、当時その体も充分成熟に近づいてい
たと思えた成瀬は、大阪の純旧家の生れで、柔らかい大阪
弁をその柔らかい舌の上のせて喋つたのだが、母親はそ
の成瀬にもまして柔らかいといえる浪速言葉を使って、い
つも出泉の耳を傾けさせたのである。……その少年成瀬の
家も丁度この近くにあつて、この家と同じようにその下方
のところにずっと竹張りのある、板壁にかこまれた古い家
だった。

そして成瀬の母親は大柄ではあるが当りが柔らかく、し
かしいつも額、鼻、下頬一面に脂を浮かせているような成
瀬などよりもずっと品があつてその鼻筋もすつと通り、犯

すことのならない威厳をその内に備えているように思えた。もちろん出泉はその時いつも母親の重子のがらがらしたあけつるげの人柄を成瀬の母親と比べていたわけなのだが、その成瀬の母親は、二人が中学校を卒業してともに上の学校に進んでしばらくして急に心臓の病気でなくなったということだったが、彼はその成瀬の家にはその時ただ一度訪ねたきりで、近づこうとしていた二人の間はそれ以後発展することなくとだえてしまったのである。その成瀬は大阪商大をよい成績で卒業して出泉とは方向のちがう商社員となり、いまは名古屋の方に駐在しているときいているのだが、もちろんその成瀬の傍には、出泉がいま追っている田口のような存在などはくっついていないにちがいないのである。とはいえ、あのおっとりとした顔をした成瀬のところにも、いや、ひよっとするとあの召集令状という赤い色をしたやつが舞い込んでいて、すでにあれも軍隊にひっぱられて戦場のただなかにいやおうなしにつれだされているかも知れはしないのだ。

……重子からの電話は今日午後、出泉が会社を出ようとする間ぎわに引きつづき二度もかかってきたのだが、電話口に出た重子は二度とも、いつになくふるえつづける声をぐっとおさえるようにして、(そう、重子が大きい体を二つに折るようにしてたえているのが、ありありとこちらの出泉の眼にも見えるようだった)彼にすぐに帰ってきてほしいと頼んだのである。尼ヶ崎発電所に大きい事故があったことを、彼女は自分の上におちてきてすでに彼女の体を

無残にも数々に粉碎して血に染めている爆弾でもあるかのように繰り返し告げた。そして彼女はそのため父親の会社ではいま大騒ぎをしていて、父親はもちろんすぐに現場の方に出かけたのだが、今夜はお帰りが何時になるかも解らないような状態であるし、家には女ばかりがいるだけでまったく心細い限りで、いつ何時父親の方からどのような電話がかかってくるかも知れないから、ぜひ、そうしてほしいと言うのである。

出泉ははやく帰るようと言っても会社をすぐ抜けるわけにはいかないと答え、大きい事故といつて一体どのような事故なのか訊き返した。するとどのような事故かはまだ充分なことはよく解らないが、何でも尼ヶ崎発電所の汽罐が一部動かなくなり、さらにそれが他の汽罐にも及びそうで、そのために辺り一帯に停電を起して、いま方々から会社の方へ苦情と文句が一ぱい殺到してきているという返事だった。もちろん出泉は日頃の母親の大げさな言葉づかいを知りつくしていたので、すぐにいまきいた母親の知らせた事柄を割引くようにして判断をたてようとしたが、それでも重子がいま置かれているいかにも不安な状態が、その電話からはよく伝わってきて、会社が終り次第、出来るだけはやく帰るようにするからと出泉は言って電話を切ったのだ。とはいえ、もちろん彼には自分のそのような言葉通りをそのまま実行に移そうという考えなどは、その時すでに頭のなかに毛頭なかったのである。その重子の電話が彼のところにとどくよりも以前に彼の心は、自分の前に

何やら不思議に見えだしてきた二重にも三重にも重なって見えたり、また、たちまちにせばらばらにちらばって二つ三つに割れて見える田口の姿にひつかまえられ、もはやそれを心からふるいおとしてそれを放って他のところに行くことなど出来なくなってしまうていたわけなのだ。彼は予定通り電話の方はそのままにして会社をはやめに出、田口の下宿にタクシーを走らせて、田口をそこでとらまえることだけに心をくだかなければならなかった。

両側からせせり出るように立ち並んだ古い二階家の間の暗い道を出て、大道出泉はようやく古いコンクリートの橋の前に立って改めてこれから自分が訪ねようとする目標の家のあるべき方向を見定めようとして、辺りをずっと見廻した。……橋は、いつまでも夕暮れの光りの明るく残っている川の上に、左右の最近完成したに違い鉄のアーチのある二つの新しい橋に挟まれるようにして架っていて、今はすべてから取り残され、誰からも忘れ去られてしまっているかのようである。

彼は橋の中ほどのところに出て行き、かすかに動く風の下に立って下方を覗いたが、川は水が濁れて黒いしめった泥土の底をひとの眼にさらし、きびしく鼻をうつ腐敗の匂いを辺り一面に放っている。右手のこちらの岸に近い、ほんの僅かばかり、まったく申しわけとでもいうように水の溜っているところには、大きい丸木の木材が皮のついたままの体を突き出して転がっていて、近くに製材所がある

のを明らかにしている。上半身裸の子供たちが裸足でその上にのり、体の平均をとりながら向かい合って声をあげ、じゃんけんを繰り返して進み出たり退いたりして、陣取り遊びをつづけている。

大道出泉は顔をあげて、向う岸の積みあげられた石垣の上に並ぶ、一軒一軒に物干台のついた古風な二階家を左手の方から右手の方へずっと見渡して行った。岸の上には屋根は赤茶け、壁板の黒ずんだ、川の泥土の臭気のしみついていると言えるような古い屋並みがつづいているが、彼は自分のめざす家はこの岸の上の屋並みのなかにはなく、もう一筋次の通りの屋並みのなかにあるに違いないとすぐさま見当をつけた。多分そこにあの小山の家はある！ 多分ではない、きっとだよ、それにちがいない、と彼は自分にきっぱり言いかけ、もはやそれで決して迷うことはなかった。

彼は先刻田口の下宿をさがしつづけて、太融寺の辺りを三十分余りも歩き廻りながら、ついにめざすその下宿を見つけ出すことが出来そうになくなって、日頃持ちつづけている自分の方位感覚にたいするいつもの確信がぐらぐらと根底から揺り動かされそうになったのだが、いまの彼は自分の方位判断に、むしろ以前にもましてつよい自信を抱いていた。なぜといって、ちがっていたのは彼の方位感覚の方ではなく田口の届け出ていた住所の方であって、それではいかに自分の初めて訪ねるいかなる家の方位にも自信のある彼だとしても、その届け出の所番地を頼りにして太

融寺近辺をぐるぐる時間をかけて廻りつづけても、当然その下宿を見つけ出すなどというわけにはいかなかったのだ。

二

大道出泉は小山の家の町名を頭に浮かべた。……立売堀……丁目……番地、小山周太郎。あの屋並みの後ろのもう一つ向う側の筋の手前、右側のなかほどの一軒、そこにある小山の家はあると、大道出泉はつづく赤茶けた屋根の上に拡がっている薄白い熱をたらりと上からたらしめているような夕風の空に眼をやりながら、もう一度自分に確かめるように言った。……もちろんあの田口の奴はその小山の家をずっと以前にさがしあてて、すでに何回かそこに足を運んでいるに違いないのである。彼はちらと考えた。すると不意に或いはあの田口の奴は、もうこの大阪に砂煙をひっかけるようにして姿をかくし東京へ向けて出発してしまっているのではないかという考えが彼をとらえた。あの田口のことだから、きつともう親父の名刺と添え書きなどははやばやと手に入れてしまっているに違いないと考えられる。そして彼の頭に改めて大文字で黒々と刻み込まれるように感じられるのは、田口吉喜という、つい先刻から彼にとつて特別のものとなったように思える田口の氏名である。そしてその田口吉喜という、いま、黒々と大文字で刻み込まれたばかりの氏名の横に、あるかなきかのような細字をもつて、しかしやはり同じように黒々と刻まれるのは、西橋

音吉という小学生時代に会って再び会うことのない、あのびっこの子供の氏名なのだ。

そう、大道出泉はかつて田口にはじめて会った時にも、田口の氏名を聞いて、その西橋音吉の氏名をその上に重ね合わせるようにして自分のうちに受け入れたように思うのだが、しかしその時彼は田口吉喜というその田口の名前はそれほど心を奪われるということとはなかったのである。もちろん彼はこの時、西橋音吉という子供の時に別れて会うことのないそのびっこの少年のことも、びっこの田口と会ったがゆえにようやく思い出したのであって、その西の橋で音がキチキチ鳴っているなどという、その名前の変ったひびきとも言うべきものに伴っている種々のエピソードなどはほとんど忘れ去っていて、その時には充分思い出すこともなかったと言っただけ。

大道出泉は自分の頭のなかにすっかり刻み込まれている田口吉喜という、彼にとつてまったく新しい、それでいて古く、しかしまた彼にとつてまったく古いように感じて全然新しいこの氏名をじっと見つめながら、橋の上になおしばらくとどまり、手すりの上にわれ知れず左手を伸ばすようにして自分の心の平静なのをたしかめた。……タグチ、ヨシキ、タグチ、ヨシヨシ、タグチ、キチキ、タグチ、キツキ、彼はその姓名を静かに次々と口に出して読みくだし、キツキ、キツキ、キツキというこの最後のキツキという読みのところをさらに重ねて自分につぶやいてみせた。

しかしそれは別に何の変哲もない姓と名にすぎないでは

ないか、そう、何の新しいところもなければ、何の古いところもない姓名にすぎないではないかと彼は改めて考えた。彼は先刻曾根崎の太融寺の辺りを田口の下宿を探して、ついにその田口の会社に届けていた下宿の住所がまったくのでたらめであることを発見した時、この田口の名前そのものがじつに奇怪なもののように思えた時のことをちらと思い出したが、いま時を経て考えると、その田口の名前も彼のうちでそれほど特別に奇妙なものにも思えはしなくなっている。

とはいえ、その田口の名前のことではないのだが、やはりいまでも少しばかりおかしいように思えるのは、彼が田口の会社に電話して田口を呼び出そうとした時、受付の女が、田口さんは今日は会社に出ておいでになる日ではないこと、田口さんはいまは会社の嘱託になられたので毎日出てはおいでにならない、週に火曜、木曜の二度だけ出てこられることになっていると言ったことなのだ。出泉は驚いて、いつからそのようなことになっているのかと聞き返したのだが、それはここ二十日ほど前からのことだということだったのだ。しかし田口は出泉のところへは、そのここ二十日間というものの、やはりその前と同じように、毎日、会社から彼の会社へ電話をよこしていたのである。田口は確かに会社からと言ったり、会社に自分がいることを匂わせていた。それゆえに出泉は田口がそれまでと何の変るところなく会社から電話をしているのだと思ひ込んでいたわけなのだ。とすれば、田口は一体どこから電話をしていたという

のだろう。そして、どうしてそのように彼は週に火、木の二日しか会社に行っていないことを出泉に隠していたのだろうか。

大道出泉はこのことを考えて、せっかくここまで来とはいえ、やはり小山のところへ行くのはこの次にして、いまのうちにあの田口の後を追ってその行方を探しあて、先ずそこに乗り込んで行くべきではないか、とちらと考えたが、彼はあわてて行けることはない、やはり考えて計画した通りに次々とやって行けばそれによいと自分に言いかけた。

田口がすでに東京の方へ発っているとすれば、その時はその時で別の手段を講ずるほかはない。しかし彼はいまは昨夜考えつづけた計画によって田口に対する追及を開始したからにはそれを續けて、やがて彼の手元に張られている袋のなかに丁度ハツ手網のなかにはいった魚のようにびちびちと腹をひるがえしながら、田口がはいり込んでくるのを待たなければならぬと思うのだ。……出泉は昨日、田口宛のあの速達を（一昨夜「明月」で田口に書くように言われて拒否して後、家に帰りついて書いたものだ）離れを訪ねてきた陽子を追い出して後に行つたのだが、彼は一日中家にごろごろして、それを悔みつづければならなかった。しかしいま彼のうちにはそのような後悔の跡形などはほとんど残ってはいなかった。彼のうちにあるのは、彼の体をぐっと前方に傾けつづけてくれるものだった。それは昨日一日中つづいていた後悔のような、一度後に去りながら、うらめしげに後方から自分の肌をめがけて

打ち返しつづける暗い波のようなものではなく、同じように暗いのだが自分のさがすものの姿を蔽い隠している灌木や草むらを焼き払い、自分の眼の前にありありとその悪につつまれた全身を浮かび上らせる力を持った炎につつまれているゆえに、確実に自分を前にすすませてくれる計画と言えるものなのだ。

彼はいまは自分がただ時を延ばしただけであることを信じていた。そうすることによって逆にあの田口を追いつめるに必要なで、で、でを自分の手の中に入れる時をかせぐことが出来る^{い、い、い}と考えるのだ。彼の前には彼が昨夜考えていたよりは一寸ばかり手ごわくて、かなりの準備をかさねて相当の悪事を企んできたに違いないと考えるほかない、恐るべきと言ってもよいような田口の姿がある。しかし、彼はそのような田口の姿を前にしても明らかに自身が転換をとげることが出来たこと、自分が消極的なところに退くのではなく、積極的なところに進み出ていることを疑うことはなかった。もちろん彼のその転換は、昨日一日家のなかに閉じこめることによって、彼のうちにしっかりとともたらされたのだ。

彼はいまのいまも自分のうちに燃えるようにしてある暗い炎を感じることが出来る。そしてそれがいよいよ暗く燃えさかって、やがては自分の全身に沿うようにして立ちのぼり、時にその火勢をもって自分の全身の形をそこに浮き上らせるのをちらと眼にするように思う。その暗い炎は彼の内に静かに燃えて自分を保ち、この川の黒い泥土からの

ぼりつづける薄黄色い臭気から彼をまもり、彼にこの大阪の夏の夕風のあらゆるものをとめてしまおう、だりりとして音のない暑さをも彼の周りからしりぞける力を、彼にもたらすかのようにも思える。

三

時は延期されたとはいえ、すでにその時を焼きつくすための火が、自分の内からその方に向けて近づけられているのを彼は信じているのである。もちろんいまや彼は田口に追われている身ではなく、彼の方が田口を追いつづける位置にいるのである。……そう、田口は今日は、いつも一日に一度は必ず向うから出泉の会社へ掛けてくる電話をいつになく掛けてこないで、どうもおかしいと考え出泉の方から電話してみたところ、田口は最近では週二回だけ会社に出て他の日は家で自分の仕事をする人間になっているそのことが明らかにされたのである。そしてその時出泉はまったくだまし打ちにあったかのように不快な、さらに言えば氣味の悪い感情を持たされたのだが、それもこうしていま考えてみれば田口を追いつづけるための一つの踏み石となり、彼の足を弾ませるものとさえなると言ってもよい。

もっとも出泉が今日、田口を追いつめ、あの田口に自分の体をぶつけるようにしてでも田口をひとつとらえてやるうとして考えた計画は、昨夜、と言うよりも今朝の明け方近く彼のうちに生れて、彼が会社の事務机にいらいらした心

をもつて向かっているうちに、充分熟してきたものだった。それゆえ彼は今日は田口からの電話をむしろ待ちかねるようにして待っていたわけなのだ。電話はいつも田口の方から掛けてきたし、田口は時々会社を休むような時でもどこか下宿の近くの公衆電話か何かをつかってでも必ず出泉のところに電話を掛けてきていたからである。しかしついに田口からの電話は午後になっても掛ってこず、出泉は、田口と出泉の間には昨日と今日の二日間も電話のやりとりがなかったにかかわらず、なお今日も電話をしてこないというのは、或いは田口が出泉を恐れはじめたのではないかと、ちらと考えていたのである。そしてそれは考えられないことではなく、むしろ充分条件のあることだった。

出泉が、田口が彼に對する以外にも方々他の處で悪事を働いていることを父親から聞いて知ったのは昨日の朝のことであつて、一昨夜の「明月」では、田口にそれに関して何かを匂わせるなどということすらもちろん出来るわけはなかったが、或いは田口はその彼自身の悪事なるものがすでにひとの口にのりはじめたことに気づき、出泉にもまた知れてしまっているのではないかと気づかっているようにも思えた。もちろん出泉がその時このように考えたのも当然のことであつて、さもなければあのように最近引き続いて毎日のように出泉に迫ってきていた田口が、出泉からたとえ一日であろうと離れ去るなどということは考えられないことだったからなのだ。

……出泉は田口の下宿の住所を田口の会社の受付の女に

調べてもらつて、紙にちゃんと書きとつたのだ。受付の女は田口の氏名も読み上げたので、出泉は書くこともないと思ひながら、それもまた同じように紙に書きつけた。そしてついに田口が会社に届け出ている住所の番地に当の田口がいらないばかりでなく、その番地に田口の下宿しているはずの上村某の家もないことが明らかにしたのである。

田口は自分の住所をひとに隠して、会社のものの誰知ることのない何処か街中にひと知れず住んでいたわけなのである。これはもちろん出泉の全身を冷やすに充分な力を持った出来事だった。彼はこのようなことがあるとは少しばかりも考えてみたことのなかった自分をはっきり知らされて、まったくあわてこんでしまったのだ。しかしこのことも田口の下宿をさがして、それが無いことを充分つきとめて来たいまでは、出泉にとつては別に不思議と言ふべきことでもなんでもないことだった。むしろそれは、やはりあの田口を追いつづける出泉の力そのものを彼のうちから、ぐつと引き出してくれるものだと言ふことが出来た。

もっとも出泉は最初は田口が自分のところに電話を寄こさないのは、ひょっとすると田口が病氣なのではないか、それも体を動かすことの出来ない熱病かなにかにかかつて困っているのではないかなども考えたのだ。もちろん田口が自分を恐れはじめたのではないかと考えて考えられないことはなかったが、ただ父親の言つたことだけを簡単にうのみにして田口の悪事をそのままに想定してしまふというのでは、彼としてはいかにもまったく情けないことだと